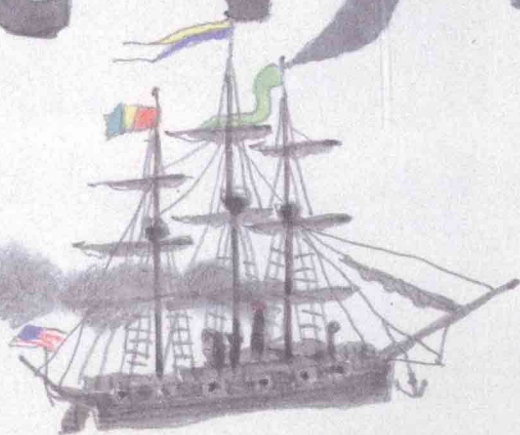


吉村昭



あ



吉村昭

太平洋戦争



アメリカ彦蔵 ひこぞう

一九九九年(平成十一年)十月七日 第一刷
一九九九年(平成十一年)十二月三日 第四刷

著者 吉村昭 よしむら あきら

© 1999, Akira Yoshimura

編集人 青羽孝雄
発行人 黒埼精三

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一―七―一 〒一〇〇八〇五五
大阪市北区野崎町五―九 〒五三〇八五五二
北九州市小倉北区明和町一―一―一 〒八〇二八五七一
名古屋市中区栄一―一七―六 〒四六〇八四七〇

印刷所 明和印刷株式会社
製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

アメリカ彦蔵

彦太郎は浜辺に腰をおろし、膝をかかえて海に眼をむけていた。砂礫のひろがる浜の波打ちぎわには、遠くまで白い色が带状にのびている。それは、海が荒れるたびに打ちあげられる貝殻であつた。

空は、初秋の空らしく澄み切っていて、一片の雲すらうかんでいない。潮の香のする微風が海を渡ってきていた。左方に淡路島が、右方に小豆島がくつきりと見え、白い帆をあげた大型の回船が二艘つらなつて西から東へ動き、その後方に小型の船がゆつくりと進んでいる。

母の死後、かれは寺小屋に通うこともせず、浜に来て海に眼をむけていることが多い。雨が降ってきてても、身じろぎもしない。常に目の前には、色白の母の顔が幻影のようになうかんでいる。十三歳のかれには、母がすでにこの世にないことが信じられなかった。

かれは、天保八年（一八三七）八月二日、瀬戸内の播磨灘に面した播磨国加古郡阿閑村古宮（兵庫県播磨町）に生れた。

幼い頃父は病死し、父の記憶はほとんどない。母と二人きりの生活になったが、目鼻立ちのとなつた母は、数年後、請われて彦太郎を連れ隣接の本庄村浜田の吉左衛門と再婚した。吉左衛門は、

妻と死別し、息子の宇之松と暮っていた。兵庫と江戸の間を往復する大型回船の沖船頭で、家を留守にすることが多かった。

彦太郎は、母の再婚に不安をいだいていたが、その恐れは全くなかった。義父である吉左衛門は、彦太郎を実子のように可愛がり、江戸からもどる時には彦太郎の喜びそうな土産物を必ず持ち帰る。義兄の宇之松も、新らたに弟ができたのが嬉しいらしく、よく面倒をみてくれた。

宇之松は陽気な性格で、遊び友だちの男たちと外を出歩き、夜おそく帰ることもある。そうした宇之松を案じた義父は、宇之松が十六歳になった時、大坂と江戸の間を往復する大型回船の船頭をしている叔父に弟子入りさせた。宇之松は船乗りが性に合っていたらしく、いち早く仕事をおぼえ、三年後には二等航海士ともいべき表仕になった。

航海をして帰ってくる義父と義兄の体からは濃い潮の香がし、顔の皮膚は艶々としていて、日焼けしている。それは、まばゆい陽光と海の輝やきの反映を受けているからにちがいがなかった。

宇之松は、航海から帰ってくると、母や彦太郎に旅先で見聞いたことを口にし、近所の家々にも行って話をする。村からほとんど出ることのない村人たちは、宇之松の話に興味をもって耳をかたむけていた。そのような義兄をうらやましく感じていた彦太郎は、ひそかに自分も船乗りになりたいと思うようになった。義父も義兄も男らしく、それは絶えず海と向き合い、さまざまな地に行つて多くの人々と接しているからなのだ、と思った。収入が多いのも魅力であった。

十歳の春、彦太郎は、母に将来、船乗りになりたいという希望をもらした。

母は、いつになくきびしい表情をして、

「つまらぬことを考えるのではない」と、強い口調でたしなめた。

水主^{かこ}から船頭になるまでには長く辛い修練に堪えなければならず、船板一枚下は地獄だと言われているように荒れた海は容赦なく人命をのみ込む。母は、義父と義兄が航海に出るたびに無事を祈っているが、心配するのは二人だけでたくさんだ、と顔をしかめた。

「私は、お前を兵庫の回船問屋にでも勤めさせようと思つてゐる。そのためには、寺小屋で読み書きそろばんをしつかりと身につけなければならない」

じゅんじゅんと説く母の言葉をもっともだと思つた彦太郎は、以前にもまして熱心に寺小屋通いをつづけた。

それから三年、今年の三月初旬、母方の従兄が百石ほどの船を浜に寄せ、彦太郎の家に立ち寄つた。従兄は四国の丸亀に近い金比羅神社^{こんぴら}に参詣したいという江戸の客九人を大坂で乗せ、丸亀へむかう途中であつた。

従兄は彦太郎に、

「金比羅参りに連れていつてやる」

と、言つた。

「船ぎらいの母は、決して許しません」

彦太郎が答えると、従兄は、金比羅神社以外には連れて行かぬから、と母を説得した。

母はようやく承諾し、彦太郎は従兄の船に乗つた。

村から初めてはなれるかれは、胸をおどらせ、帆走する船の動きに興奮した。浜から遠くながめていた小豆島の傍らを過ぎ、多くの島の間をぬけて丸亀の港に入つた。かれは従兄と金比羅神社に参詣し、さらに宮島に行き、厳島神社にも詣でた。

船は帰途につき、客たちを室の津でおろし、彦太郎は従兄と浜田へもどつた。待ちかねていた母

はかれを抱きしめ、二度と他の地へ行くようなことをしてはならぬ、と言った。

その日、母の体に異常が起った。家を出た彦太郎が、近所の家に行つて金比羅神社と厳島神社に参拝したと船旅の話をしていると、隣家の男が駆け込んできて、母が倒れた、と告げた。今まで母と話をしていただけに信じられず、かれは家に走った。

母はすでに昏睡状態におちいつていて、やってきた医師は、脳卒中（脳出血）と診断して薬を調合してくれたが、意識はもうろうとしていた。彦太郎がもどってきた喜びで、脳の血管が切れたにちがひなかった。彦太郎は氏神である住吉神社に願をかけてしきりに祈つたが、母は、倒れてから四日目に息を引き取った。五月十八日であつた。

義父と義兄は航海に出ていて、十三歳の彦太郎は、母方の叔母にはげまされて母の死にともなう手続きをした。水に湯を注ぐ逆さ水（さかみづ）をみたした大きな甕（たらひ）に母の遺体を入れ、その体を洗う湯灌（ゆかん）の折には、かれは肩をふるわせて号泣した。

母の両膝に縄を巻いて坐つた形にし、遺体が座棺におさめられ、縁側から外に出された。彦太郎は香炉を抱き、組まれた列に加わつた。

葬列は、花が開きはじめた棉島（わたじま）の中の道を三昧（さんまい）と称される共同墓地にむかい、掘られた穴の中に棺がおろされ、土がかぶされて大きな石が置かれた。彦太郎は、土に膝を突き、声をあげて泣いた。

その夜、松明を手にした親戚の者たちと墓地にむかつた。死者が生き返つて内部から棺をたたいたりしていかないかをたしかめるためであつたが、墓地には深い静肅がひろがつていた。

叔母たちは涙声で、

「お淋しおまつしやろ」

という言葉業を繰返しながら、手を合わせていたが、彦太郎はその言葉も口にできず嗚咽おえしていた。半月後、義父が帰ってきた。船で江戸から兵庫にもどつて、妻の死を報せる手紙を受け取つたのだ。義父は悲しみ嘆き、百日間の喪に服して家に閉じこもり、供養の日々を送つた。

十日前に喪が明けて、親族の者たちが集つて飲食をとにした。義兄も家にもどつていた。母のいない家にいるのが堪えきれず、彦太郎は浜に出て海をながめることを繰返していた。白い花におわれた棉畠の間の道を通つて墓地に行き、長い間墓の前でしゃがんでいることもあつた。

東の方向の海上に、新らたに大型の回船の帆が湧いていた。公儀（幕府）の御用船らしく、船尾にかすかに朱の丸の旗印が見えた。

背後に足音が近づき、彦太郎の横に腰をおろした。かれは顔を向けなかったが、義父の吉左衛門であることはわかつた。

義父は、しばらくの間黙つていたが、

「彦太郎、これからどうする。叔母さんが面倒をみてくれると言っているから、家にとどまつて寺小屋へ通うか。それとも私と一緒に船に乗つて働くか。十三歳になつてゐるのだから、炊事の雑用をする炊かしきに雇つてやつてもよい」

と、海に眼をむけたまま言つた。慎重な言葉づかいに、義父が、彦太郎の身を案じて長い間思いめぐらしていたことが感じられた。

思いもかけぬ義父の言葉であつた。船乗りになるのを強く反対していた母に一応従う態度をとつていたが、未知の世界を眼にできる航海への願望は胸に根強く巢食くさつてゐる。それに、従兄の船に乗つて金比羅神社、厳島神社に参詣した船旅は、予想以上に素晴しく、海への憧れはおさえがたい

ものになっていた。

義父が、言葉をつづけた。

「私の乗る船は、摂州灘の酒づくりのお方の持船で、住吉丸という千六百石積みの大船だ。喪が明けたらすぐに兵庫に来て船に乗るように、という船主様からの手紙が来ている。私は、明朝、兵庫へ行く」

義父の横顔に眼をむけた彦太郎は、

「連れて行ってください。船に乗りたいのです」

と、うわずった声で言った。

「そうか、そうするか」

義父はつぶやくと、しばらく海に眼をむけていたが、

「それでは家にもどって身仕度をととのえるように」

と言つて腰をあげ、背をむけて家の方に歩いてゆく。彦太郎は立ち上り、小走りに後を追った。

翌九月十三日朝、かれは義父とともに家を出て母の墓に詣でた。船乗りになるのを強く反対していた母の意向にそむくことを申し訳なく思ったが、母のいない家に一人で暮す気にはなれなかった。母は、船板一枚下は地獄の船に乗るのを気づかい、それは親として当然のこととは言え、たとえ海が荒れても、それをおかして進む船に乗るのが男らしい生き方だ、と思った。船に乗れば未知の世界を見聞でき、自分の前途が大きく開ける。

墓地をはなれた義父は、東への道をたどり土山村で山陽道に入った。それは、驚くほど広く整った街道で、旅人や荷をつけた馬が往き交い、駕籠かごも通る。かれは、周囲に視線を走らせながら父の後からついていった。

塩谷村で持参の弁当で昼食をとり、兵庫についたのは日が傾きはじめた頃であつた。途中、明石の町のにぎわいに驚いたが、兵庫はさらに大きな町で、人や駄馬が往き交ひ、荷を積んだ大八車も通る。義父と港に行つたが、岸には回船問屋の蔵がすき間なく並び、港には多くの大小の船が碇泊してゐた。

義父は、がっしりした家構えの回船問屋に入つてゆき、しばらくの間出てこなかつた。沖船頭としての打合わせをしているにちがひなかつた。

やがて出てきた義父は、回船問屋に附属した二階建の家に行つた。そこには義父が乗る「住吉丸」の水主たちがいて、集つてくると妻を失つた義父に口々に悔みの言葉をかけてきた。

かれらは義父が、彦太郎を亡妻の残した一人息子だと紹介すると、同情の眼をむけ、さらに義父が、

「家に一人置いておくわけにもゆかず、炊見習いとして働かせることにした。船頭の息子だなどと思わず、仕事に手を抜いたりしたら、容赦なく殴りつけてくれ」と、言つた。

「船に乗るのか。それはいい」

水主たちの間から、明るい声が起つた。かれらはいずれも壮年以上の者たちで、十三歳の彦太郎が加わつたことを喜んでゐるようだった。

やがて、にぎやかな夕食がはじまつた。水主たちが車座になり、若い炊が大きな飯櫃やひびつのかたわらにつき、井に飯を盛つて水主たちに渡す。彦太郎も、炊の手伝いをして、井を水主たちのもとに持つて行つたりした。酒を飲んでゐる者もいた。

飯を盛るのが一段落すると、酒を飲んでゐた義父が、彦太郎に、

「食え」

と、言った。

彦太郎は、井に飯を盛って箸をとった。白く艶のある米飯は、今まで食べたこともない驚くほどのうまさであった。このような飯を常に口にしている船乗りの生活が、ひどく豊かなものに感じられた。

半刻ほどすると、水主たちは食事を一齐に終え、彦太郎は、水主たちの生活が規則正しいのを感じた。酒を口にしていた者も飲むのをやめ、広い部屋にふとんを敷きはじめた。彦太郎は、炊の指示にしたがって食器その他を台所にさげ、甕の水で洗った。

部屋にもどると、ふとんに入った水主たちの間からすでに寢息が起っていた。かれは、義父の脇にふとんを敷き、身を横たえ、眠りに落ちた。

翌朝、彦太郎は、水主たちと舢舨に乗って「住吉丸」に行った。港に碇泊している船の中では最も大きく、かれは誇らしい気分になった。

すでに船には、多くの積み荷の酒樽が整然と並べられていた。荒物類の積み込みがおこなわれていて、岸からそれらを満載した舢舨が「住吉丸」の船べりにつき、引返すことを繰返している。酒とともに江戸に運ぶ荷であった。また、水主たちの食料である米俵や飲料水の入った樽の搬入も進められていた。水主たちは、帆の点検をしたり清掃をしたりしていた。

夕方には荷の積み込みがすべて終り、その日は船頭である義父以下すべての者が船内に泊った。夜、義父は重だった水主と舢舨に立って空を見上げ、なにか言葉を交していた。風向と天候の具合を見はかっていることはあきらかで、彦太郎は船の出帆が迫っているのを感じた。

翌日、朝食を終えて間もなく、

「出船だ」

という義父の大きな声がきこえた。

水主たちが、それぞれの持場に散った。

義父が舳先に立っていて、

「碇を抜け」

と、叫ぶように言った。

碇の爪が海底からはなれたらしく、船がゆらいだ。

「帆をあげろ」

義父の声に、水主たちが掛け声をあげて轆轤をまわし、大きな帆がゆらぎながらあがってゆく。帆柱の上端にまであがった帆は、かすかにふくらんだ。

船がゆつくりと進みはじめた。彦太郎は、胸の動悸がたかまるのを感じた。荷を積んだ大きな船が、義父の指令のままに動いてゆく秩序正しさに感動した。

船は港をはなれ、南にむかつて進んでゆく。風向は好ましいようであったが、微風で船脚はおそい。帆はふくらんだり、しおれたりしていた。

左手に多くの家々が並ぶ町が見えてきたが、水主が岸和田だと教えてくれた。海上には、前方や後方に同じ南へむかう回船が見え、海が江戸と大坂、兵庫をむすぶ主要航路であるのを感じた。加太の瀬戸を過ぎ、船はさらに南下した。

彦太郎は、先輩の炊にならって水主に出す食事の仕度をした。炊は、食事の世話以外に船内の清掃その他の仕事をするかも知った。

日が傾き、船は由良の港に入って碇を投げた。港には、多くの回船が憩うように碇泊していた。

夜になると、満ちた月がのぼった。

翌朝も前日同様の日和と風向で、「住吉丸」は出船した。前方には日比岬があり、その沖は潮流が複雑に交錯する難所であったが、「住吉丸」は難なく岬をかわし、舳先を南東にむけた。

陸岸にそうように進んだが、依然として船脚はおそく、夕刻近く周参見浦に入津した。その港を出ると紀伊半島突端の潮ノ岬をまわるが、外洋にさらされた岬の沖は潮流の動きが激しく危険も大きい。船頭の義父は、夜空を見上げていた。

翌朝、空は厚い雲におおわれていたが、順風なので出帆した。義父は舳先に立つて前方の海を見つめ、潮の流れや雲の動きを見つめている。

海に鋭く突き出た潮ノ岬が近づいてきた。波のうねりがたかまって船の揺れが増し、波しぶきが船上に降りかかった。船は直進して岬の沖を大きくまわり、東に舳先をむけた。その頃から雨が落ちはじめ、しばらくすると風向が逆風になった。

熊野近くまで来ていたので、義父は、航進を諦め、風待ちのため船を熊野の港に入れた。水が深く美しい港で、夜になると水主たちは、女と酒をもとめて舢で上陸した。

翌朝になっても雨はやまず、風向も変らない。「住吉丸」は、そのまま港内にとどまっていた。

二日後の午後、港に「住吉丸」とほとんど同じ大きさの回船が入津してきた。「住吉丸」とちがうのは、建造されて間もないらしく、帆柱をはじめ船板が真新しい。

「永力丸だ」

という声の水主たちの間から起り、手をふったり声をかけている。

その船は、「住吉丸」の船主松屋又左衛門の親戚である摂州菟原郡大石村の醸造家松屋八三郎の

持船で、そうしたことから水主同士、親しかったのである。「永力丸」は、「住吉丸」と同じく酒その他を積んで兵庫から江戸にむかう途中であった。

「永力丸」は、「住吉丸」に近づき、傍らに碇をおろした。

風待ちで退屈していた水主たちは、義父とともに髻をおろして「永力丸」に行き、彦太郎もついていった。驚いたことに六十歳を過ぎた船頭の万蔵と水主の六人が、彦太郎と同じ村の者で、かれらは彦太郎が「住吉丸」に乗っていることに驚きの眼をみはった。

義父が、手短かに事情を話すと、万蔵たちは、彦太郎の母が死んだことをいたんで義父に言葉をかけ、彦太郎に同情の眼をむけた。かれらは、母の死の悲しみを乗り越えて船乗りになつてゐる彦太郎の健気を賞めた。

「永力丸」乗組みの者たちも、「住吉丸」に訪れてきたりしたが、彦太郎と同郷の水主たちは母と死別した彦太郎を哀れに思ふらしく、食物を持ってきてくれたり、慰めの言葉をかけたりする。そのうちに、自分たちの船に移らないか、とも言うようになった。船頭の万蔵は、船頭同士として義父と親しく家にも何度か来たことがあり、同郷の六人の水主も良く知つていたので、彦太郎はかれらのすすめに応じたい、と思つた。

それを義父に話すと、

「お前は幼い。足手まといになるだけだから許さぬ」

と言つて、首を振つた。

そのことを彦太郎が「永力丸」の水主たちに伝えると、水主が船頭の万蔵に告げたらしく、万蔵が義父のもとにやつてきて、

「彦太郎のことは、おれが面倒をみる。おれたちの船に乗せてくれ」

と、執拗に頼んだ。

義父は、まだ幼いからという言葉を繰返していたが、万蔵の熱心な求めに折れて承諾した。義父としてみれば、自分の手もとにおくよりは他人のもとで働かす方が、彦太郎のためになると考えたようであった。それに、「住吉丸」には二十歳の炊がいて、彦太郎はその手伝いをしているだけで、彦太郎が去っても「住吉丸」の仕事にはなんの支障もなかった。

彦太郎は、手廻りの物を手に「永力丸」に乗り移った。

九月二十一日朝、「住吉丸」は依然として港で風待ちをしていたが、万蔵は、風が恢復したと判断し、「永力丸」の碇をあげさせた。出船した「永力丸」は、熊野灘を陸岸にそって北上した。新造船の「永力丸」の船内には木の香がし、帆も真新らしく白かった。

翌日になるとまたも風向が悪くなり、万蔵は、船を九鬼浦に寄せた。その日以後、日和も風向も恢復せず、「永力丸」は十月六日まで滞船し、翌七日になって港をはなれた。しかし、またも天候が悪化して大難所の大王崎を辛うじてかわし、翌日、志州（三重県）安乗浦（あのり）に入津した。

万蔵は、連日、氣象状況をうかがい、十二日朝、船の帆をあげさせた。天候はきわめて良く、「永力丸」は遠州灘を帆をふくらませてはよい速度で東進した。彦太郎は、左方に初めて見る美しい富士山を眼にして思わず合掌した。

船は伊豆の石廊崎をかわして相模湾を突つきり、三浦岬をまわって江戸湾に入り、船改めを受けするため相州（神奈川県）浦賀に入津した。十月十五日であった。

熊野で「永力丸」に乗り移ってから、彦太郎は、同船についての知識を得るようになった。

船頭以下乗組人数は十七名。そのうち彦太郎と同郷の者は、船頭万蔵、水主安太郎、甚八、清太郎、治作、喜代蔵、浅右衛門の七名であった。炊は仙太郎という二十二歳の男で、彦太郎はその手